

# 報 告 書

令和8年6月17日

座間市議会議長

松 橋 淳 郎 殿

基地政策特別委員会

委員長 高 波 貴 志

基地政策特別委員会で委員を派遣しました基地政策に関する事務調査（行政視察）について、別紙のとおり復命がありましたので報告します。

# 復 命 書

令和8年6月17日

座間市議会議長

松 橋 淳 郎 殿

基地政策特別委員会委員長 高 波 貴 志  
副委員長 美濃口 集  
委 員 長 瀬 未 紗  
委 員 星 野 久美子  
委 員 星 野 郁  
委 員 鈴 木 一 寿

次のとおり報告します。

- 1 視察日時 令和8年5月11日（月）～令和8年5月13日（水）
- 2 視 察 先 北海道恵庭市、陸上自衛隊 北千歳駐屯地、陸上自衛隊 東千歳駐屯地、  
航空自衛隊 千歳基地
- 3 視察項目 基地政策に関する事務調査
- 4 概 要 別紙のとおり

令和8年5月18日

座間市議会議長

松橋淳郎 殿

基地政策特別委員会

委員長 高波 貴志

## 視察所感

### (1) 恵庭市の基地政策の現状について

恵庭市には北恵庭駐屯地、南恵庭駐屯地、島松駐屯地の3つの駐屯地が所在し、さらに北海道大演習場の大部分も市内に位置している。自衛隊関係者やその家族、退職者を含めると、市民生活の中に自衛隊が深く根付いており、地域社会の一員として受け入れられている点が非常に印象的であった。

特に、災害時の連携については、平常時から自衛隊、消防、警察、関係機関が情報共有を行い、災害対策本部訓練や実動訓練を継続的に実施していることが確認できた。単に協定を結ぶだけではなく、訓練を通じて顔の見える関係を築き、災害発生時に即応できる体制を整えている点は、本市にとっても大いに参考となる。

また、演習に伴う騒音や振動についても、市民生活への影響がある一方で、防音工事への助成や各種補助金・交付金を活用し、市民生活の安定や福祉向上につなげている点も重要である。基地や演習場の存在による負担を丁寧に説明しつつ、その一方で地域振興や行政サービスに活用している姿勢は、基地を抱える自治体として学ぶべき部分が多い。

さらに、自衛隊協力会を中心に、入隊予定者の激励会、駐屯地関係者との交流、地域行事への参加などを通じて、市民と自衛隊の距離を縮める取組が行われていた。恵庭市では、自衛隊が特別な存在ではなく、日常生活の中に自然に溶け込んでいることが、地域理解の土台になっていると感じた。

一方で、本市の場合は、駐屯する自衛隊員数や基地の立地、市街地との関係性など、恵庭市とは前提条件が大きく異なる。しかしながら、災害対応における連携強化、平常時からの情報共有、地域行事を通じた相互理解の促進、自衛隊協力会の活性化など、本市においても取り入れられる視点は多い。

今回の視察を通じて、基地や駐屯地の存在を単なる負担として捉えるのではなく、地域防災力の向上や地域コミュニティの形成にどう生かしていくかが重要であると改めて感じた。本市においても、国・県・自衛隊・市民との信頼関係を深めながら、地域の安全・安心につながる取組をさらに進めていきたい。

## (2) 陸上自衛隊北千歳駐屯地について

北千歳駐屯地は約75年の歴史を有し、現在も創設当時から使用されている施設が一部現役で活用されているなど、長い歴史と伝統を感じる駐屯地であった。また、第一特科団をはじめとする主要部隊が配置され、ミサイル部隊やロケット部隊など、北海道防衛における重要な役割を担っていることを改めて認識した。

特に印象的であったのは、地域との連携を非常に大切にしている点である。駐屯地夏祭りや千歳市民花火大会との連携、音楽演奏会、地域清掃活動、献血活動、高齢者宅の除雪支援である「スノーバスターズ」など、多岐にわたる地域貢献活動を継続して実施しており、自衛隊が地域社会の一員として深く根付いていることを強く感じた。

また、女性自衛官の活躍推進についても説明を受けた。施設の老朽化という課題を抱えながらも、女性用設備の整備など、勤務環境改善に向けた取組を進めているとのことであり、時代に合わせた環境整備の重要性も感じた。

今回の視察を通じ、自衛隊は国防のみならず、防災、地域経済、地域コミュニティを支える重要な存在であることを改めて認識した。今後の地域防災や自治体運営を考える上でも、大変参考となる視察であった。

## (3) 陸上自衛隊東千歳駐屯地について

東千歳駐屯地において第7師団の概要説明を受け、北海道防衛を担う機甲師団としての高い即応力と実践的な訓練体制について理解を深めることができた。

東千歳駐屯地には、第7師団司令部をはじめ、約6,000人の隊員が所在しており、全国唯一の機甲師団として多数の戦車や装甲車両を有しながら、北海道東部地域の防衛を担っている。また、国防のみならず、大規模災害への対応や国際平和協力活動にも幅広く従事しており、その役割の大きさを改めて実感した。

特に印象的であったのは、戦車・装甲車両を中心とした機械化部隊の運用と、実戦を想定した高度な訓練である。レーザーシステムやコンピューターシミュレーションを活用した対抗訓練など、隊員の練度向上に向けた取組は極めて実践的であり、有事への備えに対する強い使命感を感じた。

また、東千歳駐屯地では、日頃から自治体や関係機関と連携した防災訓練や地域交流にも積極的に取り組んでおり、「顔の見える関係づくり」を大切にしていることが強く伝わってきた。胆振東部地震をはじめとした災害派遣活動においても、人命救助を最優先に活動し、地域住民の安全・安心を支えてきた実績は非常に心強いものである。

さらに、第7師団は全国唯一の機甲師団として、戦車・装甲車両を多数保有し、高い機動力と打撃力を兼ね備えていることが大きな特徴である。北海道は空港・港湾など重要インフラが集中する地域でもあり、その防衛・災害対応の中核を担う存在意義は極めて大きいと感じた。

近年は自然災害の激甚化に加え、安全保障環境も大きく変化しており、自衛隊と自治体の連携強化はますます重要になると考える。今回の視察を通じて、自衛隊の活動に対する理解を深めるとともに、地域防災や危機管理体制の強化において、自治体としても平時からの連携体制構築が不可欠であることを改めて実感した。今後も地域と自衛隊との相互理解を深めながら、防災・安全保障の両面から連携強化に努めていきたい。

#### (4) 航空自衛隊千歳基地について

千歳基地は、新千歳空港と滑走路を共有する全国でも特殊な基地であり、民間航空機と自衛隊機が同一空域を運用する中で、高度な管制能力と安全管理体制が維持されている点が大変印象的であった。特に、航空自衛隊の管制隊が民間機を含めた航空管制を担っていることは、平時から極めて高い緊張感と専門性のもとで運用されていることを実感した。

また、第2航空団が運用するF-15J/DJ戦闘機については、北海道周辺空域の防空任務を24時間態勢で担い、領空侵犯のおそれがある航空機に対するスクランブル発進を実施しているとの説明を受けた。千歳基地はロシアに近接する地理的特性を有しており、「北の最前線」として我が国防空の重要拠点であることを改めて認識した。

さらに、千歳救難隊による航空救難活動についても説明を受けた。U-125A救難捜索機及びUH-60J救難ヘリコプターを運用し、北海道全域における航空機事故や災害時の人命救助を担う姿は、まさに「最後の砦」と呼ぶにふさわしいものであった。厳しい気象条件下でも迅速に出動する体制は、市民の命を守る強い使命感によって支えられていることを感じた。

加えて、説明された隊員の方が、那覇基地、ブルーインパルス、そして千歳基地と、それぞれ異なる“最前線”を経験されてきたことも非常に印象深かった。国防の現場に身を置く隊員一人一人が、高い誇りと責任感を持って任務に当たっていることを強く感じる視察となった。

今回の視察を通じて、我が国の安全保障や災害対応は、こうした現場で日々任務にあたる自衛隊員の不断の努力によって支えられていることを改めて認識した。今後も、基地所在自治体としての視点だけでなく、市民の安全・安心を守る観点からも、自衛隊との連携や理解促進の重要性について議会活動に活かしてまいりたい。

令和8年5月31日

座間市議会議長

松橋淳郎 殿

基地政策特別委員会

副委員長 美濃口 集

## 視察所感

### (1) 恵庭市の基地政策の現状について

北海道恵庭市の基地政策については、地域の安全保障と市民生活との調和を図りながら進められている点に特徴があると感じました。恵庭市には陸上自衛隊北恵庭駐屯地や南恵庭駐屯地などが所在し、防衛・災害対応の拠点として重要な役割を果たしています。特に近年は、大規模災害への対応や国際情勢の変化に伴い、自衛隊の役割は一層大きくなっており、地域における存在意義も高まっているように感じました。一方で、基地が所在することによる課題もあります。訓練に伴う騒音や交通への影響、安全面への不安など、市民生活に直結する問題については、丁寧な説明と継続的な対話が不可欠と考えますが、恵庭市は特に市民に理解されていると感じました。基地政策は単に国防上の観点だけでなく、地域住民の理解と協力によって成り立つものであり、行政には国や防衛省との調整役としての重要な責任があります。その中で、恵庭市は基地交付金や関連事業を活用し、道路整備や地域振興など市民生活の向上につなげている点は評価できると考えました。基地と地域が共存するためには、地域経済への波及効果や防災力向上など、基地がもたらすメリットを市民が実感できる施策を積み重ねることが重要であると考え、本市においても学んだことを検討していきます。

### (2) 陸上自衛隊北千歳駐屯地について

陸上自衛隊北千歳駐屯地は、北海道防衛の中核的な役割を担う重要な駐屯地であり、我が国の安全保障において大きな意義を有していると感じました。近年は国際情勢が大きく変化し、防衛力の強化が求められる中、即応性の高い部隊が配置されている北千歳駐屯地の重要性はさらに高まっています。また、防衛任務だけでなく、災害発生時には人命救助や物資輸送などの活動を通じて地域住民の安全・安心を支える存在となっています。北海道は広大な面積を有し、地震や豪雪など自然災害のリスクもあることから、自衛隊の迅速な対応能力は地域にとって大きな安心材料であると考えます。自衛官の方からエアコン整備についてのお話をいただきましたが、近年の温暖化を考えると北海道の自衛隊施設においてもエアコンの設置は早急に対応すべきであると感じました。

### (3) 陸上自衛隊東千歳駐屯地について

陸上自衛隊東千歳駐屯地は、北海道のみならず我が国の防衛体制において極めて重要な役割を担う駐屯地であると感じました。東千歳駐屯地には機動力や即応性の高い部隊が配置されており、我が国を取り巻く安全保障環境が厳しさを増す中、その存在意義は一層高まっています。特に印象的なのは、平時から有事まで幅広い任務に対応できる体制が整えられている点です。防衛任務はもちろんのこと、大規模災害発生時には迅速な人命救助や物資輸送などを行い、国民の生命と財産を守る重要な役割を果たしています。近年頻発する自然災害を踏まえると、その対応能力は地域社会にとって大きな安心につながっていると感じました。また、地域との共生にも力を入れており、各種行事や広報活動を通じて地域住民との交流を図っている点は評価でき、今後もその役割を果たしていくことを期待いたします。

### (4) 航空自衛隊千歳基地について

航空自衛隊千歳基地は、我が国の領空防衛を担う最前線の基地の一つであり、その重要性は年々高まっていると感じました。北海道は我が国の北の玄関口に位置しており、周辺空域の警戒監視や緊急発進などを通じて、国民の安全と平和な暮らしを支える重要な役割を果たしています。近年は国際情勢が複雑化し、周辺国の軍事活動も活発化していることから、千歳基地の果たす役割はこれまで以上に大きくなっていると感じました。24時間365日体制で警戒監視を行い、有事のみならず平時から我が国の安全保障を支えている隊員の使命感と責任の重さを強く感じます。また、千歳基地は防衛面だけでなく、災害派遣や地域貢献活動にも積極的に取り組んでいます。大規模災害時には人員や物資の輸送拠点として機能し、被災地支援に大きく貢献しています。こうした活動は地域住民に安心感を与えるとともに、自衛隊への理解促進にもつながっていると感じました。また、PJの方からもお話を聞くことができ、千歳という土地柄故に日ごろから厳しい環境で厳しい訓練を行っているという説明もいただきました。今後も我が国の安全と地域社会の発展を支える拠点として大きな役割を果たしていくことを期待いたします。

令和8年5月31日

座間市議会議長

松橋淳郎 殿

基地政策特別委員会委員

長瀬未紗

## 視察所感

### (1) 恵庭市の基地政策の現状について

恵庭市の基地政策について、恵庭市役所基地・防災課の課長および元陸上自衛官の危機管理参与兼地域防災マネージャーにご説明いただいた。

恵庭市は面積が294.65平方キロメートル、新千歳空港から電車で13分と、アクセスのよい立地である。人口は7万人前後で、うち自衛隊員が3,000人おり、家族等含めると人口の2割が自衛隊関係者と言われている。スーパーで迷彩服を着た隊員が買い物をしている風景も日常であり、まさに「自衛隊がまちの中に溶け込んでいる」という。

広い市域の中には陸上自衛隊北恵庭駐屯地、南恵庭駐屯地、島松駐屯地および北海道大演習場が位置している。北海道大演習場は、恵庭市、千歳市、札幌市、北広島市の4市にまたがり面積は約9,600ヘクタールと、北海道矢臼別演習場に次ぐ国内2位の規模となっている。年間を通してほぼ毎日訓練は行われており、実弾射撃を使った訓練も2025年実績で246日間行われている。射撃訓練は8時から20時までの間に行われるが、申請をすれば7時から21時の間も行うことができる。朝7時頃、訓練の衝撃で窓ガラスがビリビリと揺れることもあるという。ただ市民からの「苦情」は年間10件ほどしかなく、説明員のお二人からは市民が訓練に慣れていることが原因ではないかとの見解が示された。また、市民から電話があった際には市が自衛隊から交付金をもらっていることなどを丁寧に説明することだった。

砲撃音住宅防音工事助成については、10年ほど前から指定区域の住宅に対し防音工事の助成を行ってきたものであるが、今年度ほぼ完了見込みとのことだった。今後は対象地域の拡大を目指していきたいとの話もあった。

災害時の連携について、恵庭市は北恵庭駐屯地に所在する第7師団第72戦車連隊と「災害時の連携に係る協定」を結んでいる。年1回の防災訓練では、私たちが訪れた市議会の委員会室が災害対策本部となり、自衛隊も参加して図上訓練が行われる。暴風雪対策と地震など複合災害も想定する。また4年に1度は総合防災訓練が行われるが、これは全市民が対象となり自主防災組織が各地で避難所を開設するなど実際の災害に近い形で行われるという。自衛隊の協力はかなり大きく、例えば市内の大手企業パン工場からパンを1~2,000食

用意してもらい、市役所職員の誘導の下、自衛隊の大きなトラックで各地の避難所に配るといふことも行われる。直接協定を結んでいることで迅速な連携ができるという。「基地・防災」が一つの部署というゆえんが理解できた。

今回の視察で、恵庭市では基地と共存・共生されていることがよく分かった。自衛隊関連のイベントを毎月行うなど、自衛隊を理解するための取組が推進されていることも住民理解の一助となっていると考えられる。自衛隊への理解を深めることで平和教育にもつなげていくことが大切であると感じた。

## (2) 陸上自衛隊北千歳駐屯地について

北千歳駐屯地は千歳市の北西に位置し、北海道大演習場に隣接した中規模駐屯地である。1952年に千歳市で最初に開庁し、来年75周年を迎える。大臣直轄部隊や方面直轄部隊および第7師団とそれぞれの部隊からなり、15の部隊が駐屯している。

千歳市の人口が9万7,000人であるのに対し自衛隊関係者は約3万人と言われており、市民の約3人に1人が関係者ということになる。千歳市も基地と市民の関係が密接であると言える。

井上司令への表敬訪問では、司令から北海道特有の事情などについて話があった。予算が増額になったが暖房費の値上がりには追いついていないこと、昨今の夏の暑さ対策で冷暖房を後付けで設置したが、エアコンだけでなく同時に十分な電力量の確保が必要だということなど、北海道ならではの切実な課題を聞いた。

ブリーフィングでは駐屯地所在部隊の沿革、任務、装備品等について詳細な説明があった。地域との連携の話しの中ではユニークな取組についての話があった。例えば、第1特科団には音楽隊があり、「ユーカラコンサート」を毎年開催してきた。コンサートでは地元中学校吹奏楽部とのコラボレーションも行われている。ただ、今年で音楽隊としての活動が終わるそうで、6月には最後のコンサートを企画しているとのことだった。また、「スノーバスターズ」と呼ばれる独居高齢者宅の雪かき支援があることを知った。地域の商工会が主体となり700名ほどが参加する活動で、自衛隊員も参加しているという。ほかにも、演習場を利用して花火大会を行うなど、地域特性を活かし、地域住民に還元される取組をしていることが分かった。

## (3) 陸上自衛隊東千歳駐屯地について

東千歳駐屯地は約6,000人の隊員が所属する国内最大の駐屯地である。正門に着くとまず「我らここに励みて国やすらかなり」と書かれた木の柱が目飛び込んできた。左右にある門の真ん中に立っており、後で分かったが基地内の至るところにこの言葉が掲げられていた。防人として「陸上自衛隊最強の抑止力・対処力」であるという誇りを示すスローガンであるようだ。

広大な敷地で、正門からはマイクロバスで「第7師団東千歳史料館」へ移動し、まずは隊の説明を受けた。

第7師団は1955年に札幌市内真駒内駐屯地で創隊され、今年71周年となる。陸上自衛隊唯一の機甲師団として、装軌車両を主体に装備した各種職種舞台で編成されている。「抑止」として北海道内の防衛・警備を、「対処」として他方面区に戦略機動して防衛を担っている。さらに大規模災害への対処や国際平和維持活動も行われている。道内の警備地区は、空港や港湾が多数存在する石狩、空知、胆振、日高振興局にある8市18町を担当している。毎年、戦車射撃指揮および射撃技術向上のために戦車射撃競技会が行われている。

第7師団の説明後は、史料館の展示を案内していただいた。現在の基地の成り立ち、そこに関わった人々、また世界各国の歴代の戦車から最新鋭のものまで盛りだくさんの内容だった。戦争についての話では、サイパンでの出来事や北海道における1945年8月15日終戦後の出来事など、初めて聞く話も多々あり、平和について考えるとともに、歴史を繰り返さないためにも過去に学ぶことが大切であることを改めて感じた。

#### (4) 航空自衛隊千歳基地について

航空自衛隊千歳基地は、新千歳空港に隣接している。両空港はつながっており、基本はそれぞれの滑走路を使うが場合によっては自衛隊が民間の滑走路を使うことや、その逆もあるという。管制官は航空自衛隊が担っている。

千歳基地は大正15年に村民がボランティアで開拓し飛行場を作ったことから始まっている。今では約1,060万平方メートル、東京ディズニーリゾート5個分の敷地面積を有する。その後、昭和14年に海軍航空隊が開設され、戦後米軍進駐を経て、昭和32年航空自衛隊千歳基地が開設された。

ブリーフィング後はマイクロバスで格納庫に移動し、まずはF15戦闘機の説明を受けた。50年以上前にアメリカで設計された戦闘機であり、必要があればアップデートしながら今日も主力として使われている。戦闘機としては大きな構造でエンジンが2つあり、マッハ2.5（時速3,000キロ）で飛べるという。座間まで15分で行ける計算だ。千歳基地では、平日は毎日F15の飛行訓練が行われている。朝・昼・夕と1日3回の飛行訓練に加え、月・火曜日は夜間飛行訓練も行っている。飛行前の機体の整備や飛行後の記録解析などを行う必要があるため、同じ隊員が飛べるのは1日に1回、夜間訓練がある場合は2回行うこともあるという。ちょうど正午になる頃、F15が4機ほど、千歳基地から飛び立っていった。防衛省ホームページによると、2025年度北部方面隊（千歳・三沢基地）のスクランブル発進回数は165回とのことで、南西方面隊（那覇基地）の約半数だがそれでも2～3日に1回はあるということが分かった。

また、「スーパーマン」とも呼ばれるPJ救難員について説明を受けた。PJはパラレスキュージャンパーの頭文字であり、『PJ航空救難隊』としてテレビドラマ化もされたことでそ

の名が全国に知れ渡った。全国10箇所の救援隊に各10人ほど配置され、全国で100名ほどが活躍している。海中や雪山などの救助にも備えた装備を見せていただいたが、海中用は水温によってウェットスーツとドライスーツに使い分けたり、雪山は白い迷彩服だったり、季節や場所によって使い分け、装備品によって隊員の安全も確保していることが分かった。

視察全体を通じて、恵庭市・千歳市周辺は自衛隊基地とまちが一体となっていることを感じた。座間とは米軍所在の有無の違いはあるが、市民にとって自衛隊がより身近な存在であることが分かった。引き続き、市民の考え・意見を研究したいと感じた。

令和8年5月31日

座間市議会議長

松橋 淳郎 殿

基地政策特別委員会委員

星野 久美子

## 視察所感

### (1) 恵庭市の基地政策の現状について

恵庭市には、北恵庭駐屯地、南恵庭駐屯地、島松駐屯地といった3つの自衛隊駐屯地と北海道大演習場があります。演習場では戦車・火砲を含む大規模訓練が常時実施されるということです。

恵庭市の面積は294.6平方キロメートルで、演習場の面積は全市の約23%にあたる66.77平方キロメートルで、これは座間市の面積17.57平方キロメートルの3.8倍の広さになります。

この大演習場では、2025年度には年間246日、通常は8時から20時（12時から13時は休み）まで訓練が行われているそうです。戦車射撃訓練や爆破訓練も行われているのですが、苦情は少ないとのこと、その理由は「慣れだろう」との回答でした。

座間市でもキャンプ座間や厚木基地などの航空機騒音の問題がありますが、住民は一定程度「慣れて」いるのでしょうか。基地のある自治体は住民の「慣れ」ではなく「忍耐」や「我慢」にも目を向けなければならないと感じました。

### (2) 陸上自衛隊北千歳駐屯地について

北千歳駐屯地では、まず目に入ったのが基地入り口にいた、警備の自衛隊員の装備でした。かなりしっかりとした銃を携帯していました。基地内の視察途中で別の隊員に「あの銃には実弾が入っているのでしょうか」と聞くと「お答えできません」とのこと、それはそうであろうと納得しました。次に目に入ったのは、建屋の壁にびっしりと備えられているエアコンの室外機でした。その後の話では、夏の期間の冷房が必要となり、建物をつくってから後付けになったため、そのような状態になったとのこと。物価高騰で過去の見積りが当てにならない、現在の問題はエアコン設置ではなく電源、といった主旨の話を伺いました。北海道といえば夏は涼しい、という考えはもう通用しないほど、環境は変化しているのだと痛感しました。そして、物価高騰や中東で起こっている問題、アメリカとイスラエルのイラン攻撃によるホルムズ海峡封鎖は自衛隊員の暮らしにまで影響を及ぼしているのだ、と知りました。

また、千歳市の人口9万人のうち、3万人が自衛隊関係者だとのこと。話の中で「ラピダス(政府支援のもと2022年に設立された最先端半導体メーカー。工場が千歳市)」に触れ、土地が値上がりし、住民が離れていく、と言っていたことも印象的でした。

### (3) 陸上自衛隊東千歳駐屯地について

ここではまず、ブリーフィングを受けました。その中で、東千歳駐屯地にある「第7師団」は日本の陸上自衛隊で唯一の機甲師団(戦車を主力とし、歩兵・砲兵・工兵など複数の兵科をまとめて機械化した“高速・高火力の総合戦闘師団”のこと)であることが話されました。戦車、と言ってもその種類は多く、弾をまっすぐ飛ばすものはいわゆる「戦車」と呼称しますが、その他にも高射機関砲や迫撃砲、動けなくなった戦車等の回収・整備を行う戦車回収車や、地雷原を迅速に処理する地雷原処理車などがあり、国際平和協力活動もしている、とのことでした。

戦車のキャタピラは何のためにあるのか質疑をしたところ、不整地装甲のために重さが必要であること、事故防止のための工夫がされていること、事故が起きた場合、全部隊で共有されること、などが語られました。

ブリーフィングで使われたスライドの最後には「我が国を取り巻く厳しい安全保障環境の中、我が国防衛のため、陸上自衛隊唯一の機甲師団として、各種活動に取り組んでまいります。ご支援・ご協力よろしくお願いします」とかかれ、「結語」とされていました。

その後、史料館の見学をしましたが、さほど大きくない館内でしたが、中にはびっしりと旧日本軍・自衛隊に係る品、写真、模型、文章が展示されていました。館長が細かく説明をしてくれました。彼の自衛隊に対する強い思いを感じました。また、災害時に援助に行った地域の子供からのお礼の手紙も展示されており、災害時の自衛隊員の働きには本当に感謝だ、とあらためて思われました。

### (4) 航空自衛隊千歳基地について

私はこの日、日本の政府専用機の母空港が航空自衛隊千歳基地であることを初めて知りました。建屋の中には私が想像するいわゆる戦闘機やヘリコプターのものではなく、政府専用機(特別輸送機)の関する展示や訓練風景の紹介写真などがありました。また、他国との共同のアクションに係る展示も数多くありました。これらを見学する際、実際のパイロットから話を聞くチャンスがありました。訓練として、空中給油を受けながら、8時間以上も飛行を続けるときもあるそうです。過酷な任務であろうと思われます。その隊員に、訓練をしていた時のこと、初めて一人で飛んだ時のこと、長時間の飛行でトイレはどうするのか、などいろいろと訊いてしまいました。隊員は、一つひとつ丁寧に答えてくださいました。その答えについては、ここでは割愛します。その後、その隊員からのブリーフィングを受け、基地概要等を伺いました。

千歳基地ではいつスクランブルが起きても対応できるように、24時間待機をしているとのことでした。そのための訓練は欠かせないとのことでしたが、飛行そのものもですが、準備にしっかりと時間をかけている、とのことでした。実際に格納庫を見学させていただいている時、パラシュートの降下訓練がされていたり、F15が4機連続して訓練へのテイクオフを行っていました。

そして、要救助者の捜索や救助を実施する救難機部隊の説明を受けました。航空救難が主目的だが、高い能力があるため災害救助にも向かう、とのことでした。いつでも、「ベルが鳴るとすぐ機体に向かう」と話されていました。救難に向かうヘリコプターでは、機長、副操縦士・救難員2名・機上整備員が「1クルー」となり、救助に向かうとのこと。そして、この救難員がいわゆるP.J.（パラレスキュージャンパー（PJ）は、空から降下して救助に向かう高度訓練を受けた救難員。米空軍の精鋭部隊の名称で、日本では航空自衛隊救難員の通称としても使われている）で、さまざまな救助用のツールを説明してくれました。

今世界の中には戦争を行っていたり、行おうと準備している国があります。しかし、日本には戦争を放棄する、と記した憲法第9条があります。この憲法に則して自衛隊はあるべきです。何故ならそれが、人命を救うために自らの命をかけている自衛隊員の命を守ることだから。と、改めて思われる視察となりました。

令和8年5月25日

座間市議会議長

松橋淳郎 殿

基地政策特別委員会委員

星野 郁

## 視察所感

### (1) 恵庭市の基地政策の現状について

北海道恵庭市は、北海道西部、札幌市と新千歳空港のほぼ中間に位置し、面積は294.65平方キロメートル、人口は約7万人である。座間市の約1.7倍にもなる広大な土地を持つものの、国有林が約45%、自衛隊演習場が約23%を占め、市内東部は農地となっており、市街地は市内中央東部を通るJR千歳線沿いに形成されている。市街地の西側に陸上自衛隊島松駐屯地、北恵庭駐屯地、南恵庭駐屯地が所在し、さらに西側に自衛隊北海道大演習場が位置する。国有林は演習場以西に位置する。

これら3か所の駐屯地は昭和25年から27年にかけて開設され、これを機に人口の増加が顕著となっており、近年は7万人前後で推移している。

主な産業は農業であり、市民主導による花のまちづくりが盛んであるが、近年は工業も増加傾向とのことである。しかしながら、駐屯地の開設を契機として人口が増加した背景があり、隊員やその家族を含めた自衛隊関係者は、人口の20%程度を占めるとされる。

行政と自衛隊の関わりとして、恵庭市と陸上自衛隊第7師団第72戦車連隊の間で災害時の連携に係る協定を締結しており、これは防災訓練や会議への参加など、平常時から連絡体制を充実させることで、災害発生時に道からの派遣発令前に迅速かつ適切な連携を行うことを目的とするものである。市の防災訓練では、地図上で状況を再現し、災害対策本部の運営までを行う図上訓練を行っており、消防、警察、コミュニティFM局なども参加している。また、4年に1度全市民を参加対象とした実動訓練を行っており、避難所の開設、企業の協力による食料の確保、輸送車両による物資の運搬といった実践的な訓練を行っている。

このように緊密な連携を可能としていることには、同戦車連隊が、災害派遣や防衛出動などの際に担当する地域である隊区に恵庭市を含むことが背景として挙げられる。座間市を隊区として受け持つ第1師団は、1都6県の広大な隊区を受け持つため、恵庭市と同等の緊密な体制をとるのは困難と思われる。しかしながら、総合防災訓練への参加など、市の防災活動に対して協力をいただいております、引き続き可能な限りの連携が望まれるところである。

防衛施設の所在する自治体では、騒音への対応も必要となる。北海道大演習場では、実弾射撃を伴う演習を年間250日程度実施しているが、騒音に関する苦情は年間10件程度と

ということである。演習場付近では、砲撃音住宅防音工事助成事業が行われており、工法、計画防音量に差異はあるものの、飛行場周辺の住宅防音工事と類似した工事内容とみられる。恵庭市では現在、市内2か所で騒音レベルの計測を行っており、防音工事対象区域は市内の一部が含まれる状況である。防音工事助成事業の開始から10年が経過し、対象区域の工事は令和8年度でほぼ完了する見通しであるが、初期に工事を行った建物は10年が経過し、今後は機能復旧工事が順次発生する見通しである。対象区域は、同じ騒音レベルの位置を結んだ図である騒音コンターに基づいて決定され、大まかな仕組みは飛行場周辺の騒音コンターと同様である。しかしながら、飛行場周辺の航空機騒音が連続した騒音であることに対し、演習場周辺で主となる砲撃音は衝撃性が強く、振動として感じ取られる低周波成分が多い特性があるため、飛行場周辺とは異なる算定・補正方法により評価しているようである。

今回の視察に当たっては、自衛隊OBでもある恵庭市危機管理参与も出席いただいたの詳細な解説をいただき、市全体として自衛隊との共存や、自衛隊への深い理解が感じられた。

## (2) 陸上自衛隊北千歳駐屯地について

北千歳駐屯地は、昭和27年に千歳駐屯地として開設された千歳市初の駐屯地であり、その後、昭和29年の東千歳駐屯地開設に伴い、現在の北千歳駐屯地に改称された。現在は、海上からの上陸を企図する脅威に対応する第1特科団と、陸上の脅威に対応する第7師団が主な駐屯部隊となっている。

視察に当たっては、委員全員に対し駐屯地司令との面会の機会を設けていただき、駐屯地の現状や課題について伺った。これまで開設当時の建物を修繕しながら使用してきたものの、老朽化が進み、建て替えを進めているとのことであった。北海道という地域特性から、暖房効率の観点で気密性が求められるほか、近年は夏季の気温上昇に伴い冷房設備も必要となり、従来設置されなかった空調設備の整備を進めているとの説明があった。導入には電源設備の増強も必要となるため、限られた予算の中で官舎よりも業務棟を優先して整備している状況であった。また、近年の物価高騰は隊員の生活にも大きな影響を与えており、特に灯油価格の上昇は深刻で、地域手当の上昇幅を上回る負担増となっているとのことであった。

次いで、駐屯地の概要説明をいただいた。近年における装備品の変化として、第1特科団にて運用されていた榴弾砲は廃止され、現在はロケットや対艦ミサイルを中心とした運用体制へ移行しているとのことであった。地域との交流については、花火大会と北部隊夏祭りを協定のもと同時開催しており、今年で3年目を迎えるとのことであった。また、商工会が主体となって実施しているスノーバスターと呼ばれる活動では、独居老人宅の雪下ろしや除雪作業に隊員が参加しているほか、隊員を対象とした二十歳のつどいには家族も招待して実施するなど、地域とのつながりを重視した積極的な活動が行われていた。その後、装備品の見学を行い、榴弾砲の実物を前に詳細な説明をいただく貴重な機会を得た。

防衛任務のみならず、地域のイベントや活動への積極的な参加により、地域との連携を重

視しながら活動していることが感じられた。

### (3) 陸上自衛隊東千歳駐屯地について

東千歳駐屯地には、陸上自衛隊唯一の機甲師団である第7師団が駐屯している。第7師団は、昭和30年に札幌市内の真駒内駐屯地において第7混成団として創隊され、その後、昭和37年に機械化師団へ、昭和56年には機甲師団へと改編され、現在に至る。

第7師団の主な任務および役割は、北海道内の防衛・警備をはじめ、必要に応じて他方面区へ展開して防衛作戦を遂行すること、大規模災害への対処、さらには国際平和協力活動への参加など多岐にわたっている。

平時においては、部隊の規模ごとに各種訓練を実施し、練度の維持向上に努めている。小隊規模では射撃競技会、中隊規模ではレーザー判定装置を用いた交戦訓練A C - T E S C、連隊規模では総合戦闘射撃訓練を実施している。また、師団規模では図上訓練による師団指揮所訓練や災害を想定した訓練が行われているほか、船舶輸送や自走による部隊展開を伴う長距離移動訓練も実施されており、様々な状況下における指揮・運用能力の向上を図っているとの説明を受けた。

さらに、第7師団は地域との交流にも積極的に取り組んでおり、千歳J A L国際マラソンや恵庭クロスカントリースキー大会への支援をはじめ、音楽隊による定期演奏会や栗山町での巡回演奏などを実施している。また、恵庭ガーデンフェスタをはじめとした各種祭りや地域イベントにも協力しており、地域社会との連携を大切にしている様子がうかがえた。

その後、資料館を見学し、館長から説明を受けた。館長は総合戦闘射撃での表彰経験もある自身の戦車搭乗員としての経験も交えながら、競技会の様子や戦車運用について分かりやすく解説してくださり、理解を深めることができた。また、平成29年に配置制限が解除されたことにより、現在では女性の戦車操縦手や小隊長も活躍しているとの説明があった。

資料館内には、史実をもとにした解説パネルや模型、実物資料などが数多く展示されていた。パネルの多くは館長自ら作成したものであり、模型については寄贈されたものが多いとのことであった。展示内容は、駐屯地の歴史のみならず、戦時中の国際情勢や戦車技術の進歩、主な戦車戦を再現した情景模型など多岐にわたり、視覚的に理解しやすい工夫が施されていた。さらに、関連人物のエピソードを交えた人物像の紹介や、海外の情勢についても幅広く触れられており、来館者に広く知ってもらいたいという館長の熱意が強く感じられた。

高い即応性と練度維持に努めるとともに、地域社会との交流や歴史・防衛理解の普及にも力を注いでいることがわかり、駐屯地門前に掲げられた「我らここに励みて国やすらかなり」を実感することができた。

### (4) 航空自衛隊千歳基地について

航空自衛隊千歳基地は、民間の航空機が発着する新千歳空港に隣接している。大正15年、

小樽新聞社との交流を契機として、地域住民の手により200メートルの滑走路が整備されたことが千歳空港の始まりである。千歳基地については、昭和14年に海軍航空隊が開設され、その後、終戦後の米軍進駐を経て、昭和32年に航空自衛隊千歳基地として開設され現在に至る。千歳基地の敷地面積は約320万坪に及び、現在使用されている庁舎は、昭和15年に海軍航空隊司令部庁舎として建設されたものであり、現在も活用されている。

千歳基地には、防空任務を担う北部高射群、戦闘機による防空を担う第2航空団、政府専用機を運用する特別航空輸送隊、救難任務を担う千歳救難隊、千歳空港の管制業務を担う千歳管制隊、さらに全国各地の基地防空に関する部隊行動の教導を担う基地防空教導隊など、多様な部隊が配置されているが、今回は第2航空団に関する説明をいただいた。訓練は平日に実施され、月曜日および火曜日は夜間訓練1回を含む1日4回、水曜日から金曜日は夜間訓練を除く1日3回の訓練を行っている。訓練空域は北海道西方および青森県沖南方などに設定されており、訓練は二手に分かれた対戦形式で実施される。訓練後には、機体に搭載された記録装置のデータを解析し、飛行内容や戦術行動の評価を行っているとの説明があり、防空任務遂行のため、日頃から高い練度維持・向上に努めている様子がうかがえた。

その後、F-15J戦闘機の実機を見学しながら機体の説明を受けた。導入から少なくとも30年近くが経過しているものの、機体の外観は非常に良好な状態に維持されており、日々の訓練や防空任務により相当数の飛行を重ねている中であっても整備が徹底されていることが感じられた。今回、概要説明や装備品の戦闘機に関する説明では、第2航空団所属の操縦経験豊富な面々に説明をいただくことができた。

続いて、千歳救難隊についても説明をいただいた。初めに、救難捜索機U-125について説明を受けた。本機は現場へ急行し、救助対象者を発見するための機体であり、搭載される赤外線暗視装置は温度差2度程度を検知し、映像として捉えることが可能ということである。一方で、同機は退役が予定されており、後継機の導入はないとの説明があった。その背景として、携帯端末やGPSの普及により、固定翼機による捜索の必要性が低下したということである。次に、UH-60J救難ヘリコプターおよび救難任務について、現役の救難員も交えて説明を受けた。本機は救難用途に特化しており、キャンプ座間で目にする同種の機体とは、空中給油プローブなど細部に違いが見受けられた。救難任務については、海上から山岳地帯まで広範囲に及ぶものであり、落下傘降下による救助、洋上での救難活動、さらには雪山を含む山岳地帯での救援活動など、あらゆる状況下で任務遂行が求められるものである。救難装備については、現地の状況や救難対象者の状態に応じて準備され、降下後数日間の活動に備える装備もあるとの説明があり、救難任務の過酷さと隊員の高い能力について理解を深めることができた。

今回の視察先ではいずれも、それぞれの分野で経験豊富な方々にご対応をいただいた。説明では装備品や部隊運用に関する部分に重きを置いていたと感じた。興味のある人に向けた広報が主な目的であるためと考えるが、その根底には、外からの脅威を正しく認識し、練度

向上に努めることが国を守ることにつながるという前提が共通認識にあり、地域からも理解を得ていることにより、良好な関係を築くことができているのではないかと感じた。

令和8年5月14日

座間市議会議長

松橋淳郎 殿

基地政策特別委員会委員

鈴木一寿

## 視察所感

### (1) 恵庭市の基地政策の現状について

恵庭市は、陸上自衛隊演習場が市域の約23%を占め、人口の約2割が自衛隊関係者で構成されるなど、全国的にも自衛隊との関係が深い自治体である。今回の視察では、恵庭市基地・防災課より、基地行政、防災協力体制、自衛隊との連携、地域住民との関係性などについて詳細な説明を受けた。

特に印象的だったのは、自衛隊を単なる「基地」ではなく、地域社会を支える重要な存在として位置付けている点である。担当者からは「隣の家のお父さんが演習している」という説明があり、自衛隊員と地域住民が日常的に近い距離感で生活している様子が伝わってきた。基地と住民が対立する構図ではなく、地域社会の一員として共存していることが強く印象に残った。

また、防災分野においては、年1回の災害対策本部訓練、4年に1度の総合防災訓練、自衛隊連絡幹部との常時連携体制など、平時から顔の見える関係づくりが徹底されていた。災害発生時において、自治体と自衛隊が円滑に連携できるよう、平素から実践的な訓練を積み重ねている点は大変参考となった。

さらに、基地交付金や防衛補助についても説明を受けたが、単に財政支援として受け止めるだけではなく、地域のインフラ整備や防災力向上へ活用し、市民生活の向上へつなげることが理解できた。

今回の視察を通じ、自衛隊と自治体の関係は、防衛だけでなく、防災、地域経済、人的交流など多面的な関係性の上に成り立っていることを実感した。座間市においても、基地所在自治体として、防災協力や地域交流を更に推進し、平時からの信頼関係構築に努める必要があると感じた。

### (2) 陸上自衛隊北千歳駐屯地について

北千歳駐屯地では、隊員募集、人材確保、施設整備、寒冷地特有の課題などについて説明を受けた。北海道という広大な地域において、厳しい自然環境の中で部隊運用が行われている実態を学ぶことができた。

説明では、近年の自衛隊全体における人材不足が大きな課題となっていることが紹介され、地域イベントへの参加や吹奏楽活動、ユーカラコンサートなどを通じて、地域との接点を増やしながらか募集活動へつなげているとのことであった。単なる募集活動ではなく、地域との信頼関係を築くことが隊員確保にもつながっている点が印象的であった。

また、女性隊員増加への対応として、女性専用トイレ、宿舎整備、女性専用スペース確保などが進められていた。一方で、北海道特有の古い施設では改修が追いつかない現状もあり、老朽化対策の必要性についても説明を受けた。

さらに、北海道特有の課題として、寒冷地であるがゆえの維持コストの高さや、灯油価格高騰の影響なども説明された。近年の物価高騰は隊員生活にも大きく影響しており、厳しい環境の中で任務遂行している実情が理解できた。

Rapidus 進出による地域経済への影響についても話題となり、地価や住宅価格高騰など、地域社会全体へ影響が及んでいることが紹介された。企業誘致が地域活性化へつながる一方で、住民生活への影響も考慮する必要があることを感じた。

今回の視察では、自衛隊を取り巻く課題が、防衛分野だけでなく、人口減少、人材不足、地域経済、施設老朽化など、全国自治体共通の課題と深く関係していることを実感した。

### (3) 陸上自衛隊東千歳駐屯地について

東千歳駐屯地では、第7師団の概要、戦車部隊運用、防災対応、歴史資料館視察などを行った。第7師団は日本唯一の機甲師団であり、北海道防衛の中核を担う重要部隊である。

視察では、戦車射撃競技会、AC—TESC 対抗演習、GPS・レーザーを活用した高度な訓練、災害対応シミュレーションなどについて説明を受けた。近年はデジタル技術を活用した実戦的訓練が進められており、隊員の能力向上に大きく寄与しているとのことであった。

また、胆振東部地震や有珠山噴火など、北海道内で発生した災害への対応実績についても説明を受けた。自治体との共同訓練や防災連携を重視しており、「顔の見える関係づくり」が災害対応において重要であるとの説明は大変印象的であった。

歴史資料館では、ノモンハン事件、サイパン戦、占守島の戦いなどについて展示されており、平和の尊さや国防の重みを考えさせられた。特に、一般にはあまり知られていない占守島の戦いについて丁寧に継承されていた点は非常に意義深いと感じた。

さらに、女性小隊長や女性操縦士の活躍についても紹介があり、将来的には女性のみのかルー編成も期待されているとのことであった。自衛隊における女性活躍推進が着実に進んでいることを感じた。

今回の視察を通じ、防衛力強化のみならず、歴史継承や地域防災への取組も含め、自衛隊が多面的な役割を担っていることを改めて認識した。

#### (4) 航空自衛隊千歳基地について

航空自衛隊千歳基地では、F 1 5 戦闘機運用、対領空侵犯措置、政府専用機、航空救難団などについて説明を受けた。千歳基地は、日本の北の空を守る最前線基地として、24時間365日の即応態勢を維持している。

視察では、対領空侵犯措置、いわゆるスクランブル待機について詳細な説明を受けた。昼夜を問わず、年末年始を含め常時待機体制を維持しており、領空侵犯の恐れがある場合には即座に発進できる体制が整えられている。日本の安全保障が、日々の地道な即応態勢によって支えられていることを強く実感した。

F 1 5 戦闘機については、最大速度マッハ2.5、空中給油能力、長距離展開能力などについて説明を受けた。また、整備員による日々の丁寧な整備によって、高い安全性と即応性が維持されているとのことであり、整備隊員への強い信頼感が伝わってきた。

政府専用機については、千歳基地に配備されている理由や、羽田空港を経由して要人輸送を行う仕組みなどについて説明を受けた。政府専用機の運用も、特別なパイロットだけではなく、自衛隊全体の高度な操縦技術によって支えられていることを学んだ。

航空救難団では、津波偵察、山岳救助、洋上救助、知床事故対応など、人命救助活動について説明を受けた。救難隊は「命を救う最後の砦」として活動しており、東日本大震災時にも多数の救助活動を行ったとのことであった。

また、U-125A救難捜索機やUH-60J救難ヘリコプターの装備についても視察し、厳しい気象条件の中で活動するための高度な装備や訓練について理解を深めることができた。

今回の視察を通じ、航空自衛隊が防空任務だけでなく、災害対応や人命救助においても重要な役割を果たしていることを改めて認識した。